

もりおか女性センターの取り組み

もりおか女性センター 田端 八重子

もりおか女性センターの田端でございます。この場をお借りいたしまして、全国の皆様からの物資、それから支援金等のご支援をたくさん頂戴いたしました。あらためましてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

それでは報告を進めさせていただきます。

岩手県は大変広い県でございまして、東京の7倍なのだそうです。市町村が34市町村ありまして、その中の12市町村、35.29%が何らかの被害を受けました。県都は盛岡でございまして、盛岡から沿岸のほうへ移動をするのですけれども、実は一番上に洋野町というところがあるのですが、ここからずうっとこの間、ここが12市町村でございまして。久慈から真っ直ぐに北上山系があり、県都盛岡市から宮古、一番近いのですけれども、宮古までがだいたい100キロです。皆さんご存知の陸前高田まで行きますと、120キロ位あるという、そういう距離の中で、私たちは支援をしてきたということでございます。

先ほどタクシーの運転手さんに、「東京から100キロ間ってどのくらいの距離ですか？」と聞きましたら、「小田原ぐらいかなあ」と。「千葉のほうに行くと、君津かな」とおっしゃっていました。それくらいの距離を動くわけです。ガソリンが全然入らないという状況の中で、3月25日に初めて大船渡というところに私は入りました。ガソリンを満タンにしないと、行って帰ってこられません。現地でガソリンを入れるようなそういう気持ちで行くわけにはいきませんので、盛岡で満タンにしていくのが当然のことです。

◇もりおか女性センター

もりおか女性センターの話をさせていただきますと、2000年に開設されまして、公設公営で、現在指定管理者制度が導入されていまして、私が所属しております「NPO法人参画プランニング・いわて」が、その指定管理者として、現在

2期目の3年、通算で6年目にあたります。

いろいろな事業をやっておりますが、委託事業として、盛岡市配偶者暴力相談支援センター、それから女性の起業を応援する委託事業として盛岡市と契約をしているところでございます。

◇発 災

3月11日、大震災が発生いたしました。今ちょうど見ていたのですが、この今の時間あたりに、たぶん大きな津波が来ていたのだなと思っています。

停電をしたのですが、約2日後には通電をしまして、私たちもテレビを見ることができました。たぶん全国の皆様のほうが先に様子をご存知だったのだろうと思います。私たちは全く見るできませんでした。沿岸で何が起きているかということを実に知らなかったんですね。2日後に通電して初めてテレビを見て、あんなに綺麗だった沿岸が、あんなに美味しいお魚が獲れた沿岸が、「何なの、あれは!」「これって何!？」というのが、職員全体の第一声だったんですね。私は岩手県の出身ではないのですが、県の出身者であります職員たちが、夏には必ず、短い夏なんですけれども、その沿岸に行って海水浴をしたり、子ども時代からずっといろんな思い出を持っていました。その沿岸が全く壊滅状態、ということをよくお聞きになるかと思いますが、本当にそのとおりでした。地震よりも津波でした。津波というのは、すべてを持っていってしまう、持ち去ります。恐いというような類いのものではなくて、全部さらっていっちゃうという感じなんです。現地に入りますと、自宅の基礎だけが残っている。上物が全部なくなっている。本当に何も無い状況にありました。

私は先ほどの12市町村の全部を歩いてきました。車ですけれども一番ひどかったところは、やはり陸前高田。それからちょっと上の大槌。それから山田。それから宮古市に合併したんですけれども田老というところ。それからもう少し北にいまして野田村。ここが大変な被害を受けました。

◇もりおか女性センターとしての役割は何か？

その映像が飛び込んできた時に、男女共同参画推進センター、いわゆる、もりおか女性センターとして、私たちが何をやらなければいけないのだろうか、何ができるんだろう、100キロ、120キロ離れたところに、どういう支援ができるんだろうかということをもとに考えました。当然私たちができることって、限界があります。しなければいけないことを、どなたの力を借りて、どういうことを求め

れば、やりたいことができるのだろう、しなければならぬことができるのだろうというのが職員との間の会話でした。

◇もりおか女性センターの取り組み

最初に、デリバリーケアと言いますが、もりおか女性センターの取り組みとしてこれを推進しています。今も行っています。一番最初に、「支援をしよう、何をやるか、何ができるのだろうか」と考えていた時に、納棺師さんから電話を頂戴しました。女性センターという名前だから、お化粧品があるのではないかと思われたみたいなんです。ご遺体をきれいに、せめてお顔だけでもきれいにしてお送りしたいというようなお考えがあったようでして、「お化粧品がないか？」というふうに聞かれました。私たちのところには全くお化粧品はありませんでした。「何をどう揃えればいいんでしょう」と言うと、「濃い目のファンデーションが欲しいのです」とおっしゃったんです。なぜかと言うと、あちらこちらにぶつかって、顔に青いあざがいっぱいできている。それを何とか隠してあげたい。ご家族、とくにお子さんとの対面の時に、きちんとした形で、対面させてあげたいと思われたようです。「さあどうしよう」と私たちは考えました。「ちょっと待ってください、後でお返事します」と言って電話を切りました。私の友人が化粧品メーカーさんとちょっと懇意にしている人がいましたので、そちらに電話をかけて、その化粧品を送っていただくようにしました。「何人分欲しい？」と言われたんですけど、私はよくわからないのです。ただ人数分、何人って言えばいいんだろうと思って、「100人分」と適当に言ってしまいました。さすが大手のメーカーさん、100人分がちゃんと送られてきました。そして箱を開けてみてびっくりしました。私たちはファンデーション100本、口紅100本、それから頬紅100本というふうに、8種類の基礎化粧品も含めました商品が入っていると思ったのですが、実はきちんと一人分ずつのセットにして箱の中に入っていました。すぐに持ち出せるように。こういう心遣いをしてくださったことに、私たちはとても感動しました。職員が、「こんなふうにするものなのだ」というふうに思ったようです。そのことは本当に職員にも良い経験だったのだろうなと思っています。その後、NGO、NPO、企業、団体、個人など全国の皆様から物資をたくさん届けていただきました。

初期は食料品であったり、水であったり、特に3月11日、寒かったんですね。沿岸も3月になると雪が降るのですが、やはり雪が降りました。とても寒かったです。ですから特に暖かい洋服とかヒートテックの下着などは好まれました。

私たちは「物資の支援をしております。お電話ください」と、テレビ、FMラ

ジオ、地元新聞社のほうに取材をしていただきますと、どんどん電話がかかってきました。「これが欲しい、あれが欲しい」ということで。それで、欲しい物を欲しい方にきちんと届ける。そしてお顔を見て、声をかけながらお渡しする。約束をしたものを必ず手渡すということを原則に支援してきました。

◇物資支援

物資の支援につきましては、公的な機関の支援は、公正公平ということをとっても重んじていらっしゃいます。阪神淡路の時にも大変問題になったのですけれども、100人の方がいらっしゃって、おにぎりが80しかなければ、配らないという選択をされます。今回もこのことが起こりました。全く学んでいなかったのだなということで、私たちはがっかりしました。教訓として残っていないということがわかりました。

私たちはNPOとして民間の支援者です。そして多様性に応えてきました。時間が過ぎていき4月になると、皆さん勤務をするという方たちが多かったので、少しお化粧がしたい、ブラジャーが欲しい、そして着の身着のまま全く何も無い状況の中でしたが、外に出るときの、ちょっとしたおしゃれとか、そういうものが欲しいというように要望が日替わりメニューのように変わってまいりました。そのことに応えようということで、全国の皆様からご支援をいただきました支援金で、その物資を買って、詰めて、そしてお届けしました。多様なニーズに応え、個別対応をしながら物資を届けていきました。ただ配送ということではなくて、きちんとその時にお顔を見て、「お困りのことございますか?」「何かありますか? 恐かったですよね」という話を必ずしながら、逆に話を聞かせていただきながら帰ってくるということを、ずうっと続けてきて、現在も続けています。

◇支援金を受入

要望が個別で多種多様なものですから、その物品を買い求めて市内を走り回ったということがあります。その資金は、全国の皆さまからいただきました支援金で調達いたしました。

それから現在はほとんどの方が仮設住宅に移っていらっしゃいます。仮設住宅は6点セットが用意されているのですけれども、仮設に入らない方、いわゆる民間アパートに住まわれている方、それから公的な住宅に入られている方、それから自分の1階が流されたけれども、2階で生活できるという方、冷蔵庫や炊飯器、それから電子レンジなど、そういうものが揃っていない。自分たちで調達しなけ

ればならないのです。そういった生活の必需品がとて多くなりました。

爪切りなど、たぶん皆さん2つや3つ引き出しの中にあるのではないかと思います。体温計とかヘルスメーター。この間はアイロンという要求がありました。それから自転車ですね。つい最近お届けしたのはミシンです。ミシンは、自分が仕事としてやってきたんだけど、なくなってしまったので仕事ができないという女性からの要望でした。2台お届けしました。ミシンでもいろいろな機能が付いているものが必要かと思いましたが、そうじゃないと。直線が縫えればいいのですというお話だったので、わりと安価なもので対応できました。そういうふう

◇東日本大震災被災地における女性の悩み・暴力相談

私たちがしなければならないことというのは、女性の相談窓口の開設です。早速にそのことをやりました。5月10日から『女性の心のケアホットライン』というのを実施しました。人間関係に関する悩みがとて多く寄せられています。それから財産分与のこと、それも様々あります。

7月10日からは、『女性の心身の健康相談室』を2ヵ所で、対面の相談をやっています。それも電話相談内容とだいたい同じようなことが寄せられています。

◇被災地緊急雇用創出事業

被災地緊急雇用創出事業、これは厚生労働省の事業なのですが、『被災地女性自立のためのデリバリーケアプロジェクト』と名付けまして、『芽でるカー』で買い物代行と安否確認を今行っています。

先ほど地図を見ていただきましたように、北上山系があって、少し平らなところがあって、海があってという状況だったんですけども、平らなところは市街地があったのですが全部津波にさらわれてしまいました。そこに仮設住宅を建てることは不可能なんですね。元の市街地の奥や丘陵地に仮設住宅が建てられていて点在しています。お買い物ができないんですね。それで私たちはそのお買い物を代行し、それに安否確認をセットにした事業を考えました。

そして8月22日、本当に先月なんですけどもスタートしています。

これは宮古市、大槌町、野田村の一市・一町・一村でこの事業を展開しています。3地区で女性たちそれぞれ3人、ですから9人、それから盛岡市に1人、事務局を担当してもらっている方で、10人の女性の雇用を行いました。

◇被災地でのジェンダー・バイアス

被災地でのジェンダー・バイアスということ、とても感じていました。私たちは多くのところを廻ったのですが、とても被災という非日常状態の中で、社会は保守化しました。そして固定的性別役割分業がとても強化されました。今まで私たちは何をやってきたのだろうと、とても悔しい思いをしました。「この10年間11年間何やってきたんだろう…」職員もそう言いました。女性たちはケア役割に引き戻されていきました。

「こんな非常時に何を言っている！」というように、全く聞く耳をもたない管理者がいます。それから女性の意見なんて、とても聞いてもらえないし聞き入れない。男性は瓦礫の仕事をすることになりました。5月の後半ぐらいからだだったと思いますが、これは有給です。しかし女性たちは、朝昼夜の三度の食事を避難所で作っているのですけれども、全て無給でした。男性たちは遊技場に通っています。中には女性の姿もありますが、閑古鳥が鳴いていたパチンコ屋さんが、今満杯状態です。阪神淡路大震災の時と同じだというふうに聞いています。

◇支援とは、「日常」を積み上げる

発災によって被災された方々は、日常から非日常へと落とされていきました。避難所のハード面は、私たちの力ではどうにもなりません。しかし個別の要望に応えることで「日常」を取り戻していただくことはできると思いました。それが「支援」だと思っています。

被災地の復旧・復興は「人の力」がなければなりません。その人の力の回復は一人ひとりの被災された方々が日常をひとつでも多く積み上げられることだと考えています。

◇防災に向けて

防災に向けてなんですけれども、実は防災委員を増員したいなといつも思っているんですね。それは今回被災地で、助産師、看護師、保健師、それからケアマネージャーたちがとても活躍なさいました。ご自分のお休みの日に避難所を廻って、多くの被災者の方々と話をされていました。こういう方たちこそが、防災委員に増員されるのが当然だろうなと私は思っています。この方たちの意見をぜひ聞いてほしいなと思います。

◇女性センターとしての使命は？ まとめにかえて

女性センターの使命として、女性への暴力の防止および根絶。現地ではレイプが発生しました。それからDVもありました。私どもで保護命令が1件受理されており、DVも増えています。

それから女性の経済的自立を図っていくこと。先ほどの、芽でるカーで仮設住宅内を走ってくれているのです。3月31日で、この事業は終わります。その後4月1日から、私たちは新しい資金を頂くところを開拓しながら、もう2年位、彼女たちとこの事業を展開していきたいなと思っているところです。少し時間がオーバーいたしました。これで終りたいと思います。ありがとうございました。

質 問

もりおか女性センターの職員は今、何人いらっしゃるのでしょうか。

回 答

今、センター職員は17名です。これは盛岡市からもりおか女性センターの指定管理者としてその事業を受託しています。震災後、職員としての本分があるために長期に亘る支援活動には従事できませんでしたが、物資の調達や全国から送ってくださった物資の仕分や被災地への搬送を行っていただきました。それ以外の、いわゆる厚労省と内閣府とやっています事業につきましては、全く別枠で雇用をして事業を展開しています。ホットラインの女性相談員は、全国女性シェルターネットさんに全国から盛岡まで来ていただいています。相談の中で継続しなければならないものについては、もりおか女性センターの相談室のほうを紹介してもらおうという形をとっています。